

保篠龍緒探偵小説選Ⅰ
目次

創作篇

妖怪無電

紅手袋

襲はれた龍伯

黄面ホアンミユンチュイ具

指紋

蠟人形の秘密

呪はれた短劍クリス

血染めのメス

2
121
251
263
280
287
298
310

仏国の探偵小説に就て	322
欧米探偵作家に就いて	326
スリのあの手この手	338
毒殺と毒薬	341
<small>アントル・スウ</small> 秘密通信	346
欧米の警察制度	350
保篠龍緒（星野辰男）について	366
【解題】 矢野歩	374

凡例

- 一、「仮名づかい」は、「現代仮名遣い」（昭和六一年七月一日内閣告示第一号）にあらためた。
- 一、漢字の表記については、原則として「常用漢字表」に従って底本の表記をあらため、表外漢字は、底本の表記を尊重した。ただし人名漢字については適宜慣例に従った。
- 一、難読漢字については、現代仮名遣いでルビを付した。
- 一、極端な当て字と思われるもの及び指示語、副詞、接続詞等は適宜仮名に改めた。
- 一、あきらかな誤植は訂正した。
- 一、今日の人権意識に照らして不当・不適切と思われる語句や表現がみられる箇所もあるが、時代的背景と作品の価値に鑑み、修正・削除はおこなわなかった。
- 一、作品標題は、底本の仮名づかいを尊重した。漢字については、常用漢字表にある漢字は同表に従って字体をあらためたが、それ以外の漢字は底本の字体のままとした。

創作篇

妖怪無電

「いえ……」と若い船員の顔は不安の色を浮かべながら「事務長室が鍵してあるんです。いくら呼んでも返事ありません」

「寝ているんだろう」

「そんなはずはありません。昨夜十二時頃喫煙室にいたんですが、その後どこにも姿を見ないんです。寝ているって、もう八時ですから……」

「うん。行ってみよう」

船長はそのまま、事務長室へ出かけた。事務長室の前には二人の船員が不安らしい顔をして立っていた。

「返事がないか？」と船長が尋ねた。

「ハア。船内を捜したけれども、見えません」

「おい、事務長……木村君！」船長は呼びながら扉を叩いた。

返事がない。彼は合鍵を出して扉を開けた。

「ヤッ！」一同は入口に棒立ちになった。

室内は誰もいない。

船長はじめ入口に立ったまま狭い事務長室を呆然と見廻していた時、不意に船長の肩をポンと叩いたものがある。

「どうしたんです、船長さん」

船長がふり返って見ると、顔なじみの一等船客が立っ

◇事務長の行方不明◇

明日の入港を控えて、暁の海を静かに走っている新洋丸。朝まだき波は東の空に薄紅の光を浮かべて、人はみな快い暁の床から離れようとしていない時、船長室の扉をあわただしく叩いた。

「船長」

「おお」太い声が出て扉の蔭からヌツと船長の顔が出た。

「何か？ 朝飯の支度が出来たのか」

ていた。

「やあ、秋山さんですか。……いえ、何んでもないんです」

「何んでもなかありませんね」と秋山がいった。彼は一等船客で秋山達之輔たつのすけという快活な紳士で船長とは航海中懇意になっていた。「事務長が行方不明ですな」

「エッ！ ど、どうしてそれが……」と船長がきつとまった。驚いた船員達はまじまじと秋山の顔を見ている。

「解るつて？ 一目で解るじゃありませんか……御覽なさいあれを……」と彼は平然として事務長の机の上を指した。

「鍵がある。事務長の鍵でしょう」と彼はつづけていった。「事務長が、鍵をあんな風に投げ出しておくはずがないじゃありませんか」

「なるほど」と船長は感心しながら、指された卓子テーブルの上の鍵をとりあげようとしたりした。

「お待ち下さい」と秋山が叫んだ。「私はこうした事件に多少関係して経験がありますが、下手に動かして肝心の物的証拠を失くしてしまつちゃあ困りますからね。

……しかし、船長さん、とにかく、ここはこととしておいて、今一応事務長さんが船内にいないともかぎりませぬから、その方も捜して頂いたらどうでしょう」

「そうですね。じゃあ、君達」と彼は船員に向つて、

「よく船内を捜してみてくれ」

「ハア！ 承知しました」

「船長さん。何分の結果のわかるまで、この事は内分にしたらどうです」と秋山が注意した。

「そうですね。では君達もその積りで、僕から指図するまで内分にしておいて、よく捜してみてくれ」

船員等は旨を含んで出て行つた。秋山は静かに扉を閉めてじつと四辺あたりを見廻した。

「船長さん」と彼がいった。「突然飛び込んで来たので、かれこれ申して失礼しましたが、実は僕は以前警視庁にいた事があるので、多少探偵方面にも関係した訳なんです。少しは御手助けが出来ようかと思ひましてね……」

「いや、有難う。全く不意の事で私も弱つていたんですが、是非一つ御力添を御願ひします。……ところで事務長は……」

「金庫もやられましたな」と彼は話中途に突然こう叫んだ。

いわれて見ると金庫の扉が完全に閉つていないらしく、極く少しく浮いたようになっていた。果然金庫は船長の手で音もなく開いた。が中は整然となつていて、別に取らみだした様子もなかった。

金庫内には主として船客から保管を依頼されている色々な貴重品が入れてあった。船長は抽斗ひきたしから保管品あずかりものかへ預控簿を出して内容の品を一つ一つ照合した。

「別に異状がないようですね」と秋山が傍そばからいった。

「封書一通……A三二号……」

「これですね」と秋山が大きな袋へ入った封筒をとりあげた。

「今一通ありませんか……二通です」

「二通?……」

秋山と船長とは暫く捜してみたが発見されなかった。

「誰れです、預け人は?」

「米国貿易商大沢森おおいし二氏です。一等船客の……」

「ああ、ニューヨークの人ですね」

大沢氏から預った封書一通が見えない外は全部揃っていった。

「盗まれたのかな?」と秋山は考え込んだ。「それとも事務長が他へ出しておいたかな?」

船長と秋山達之輔とは無言のままじっと室内を見廻した。

事務長室といっても広からぬ部屋で、奥には事務長の寝室がつづいて、そこには窓もない。事務室は廊下に面した方に丸い小窓があいているが、人間の出入出来ない

小さい空気抜に過ぎない。

唯一の通路になつてゐる入口の扉ドアへ完全に鍵をかければ全く密閉した部屋である。その密閉した室内に入口の扉の鍵を残して、事務長の姿が見えぬ。金庫が開けてある。品物が一つ紛失している。

不思議な事件だ。

「鍵が卓子テーブルの上にあるのがおかしいですね」と秋山がいった。

彼は卓子の上をじっと見つめていた。鍵の置いてある近くに小さな傷がついていた。

「この傷は以前からありましたか?」

「さあ……」と船長がいった。「どうですかなあ。別にそんな事までは注意していませんが……」

「いや、前からあつた傷じゃあない。どうも新しく出来た傷らしい」と秋山はしきりにその卓子の上の傷跡を気にして調べていた。そしてジロジロと室内を見廻して考えていた。

いくら調べても、見廻しても室内には別に異状がなかった。のみならず寝室には異状を発見する事が出来なかつた。

「船長さん。ここにいた所が仕様がありませんから、あなたの部屋へ行って御相談しましょう」と秋山がいつ

た。

船長は船員を呼んで鍵をかけた事務長室の戸口を嚴重に監視させる事にした。

二人は船長室へ戻った。

「不思議な事件ですなあ」

暫くしてから船長が口を開いた。

「全く不思議といえは不思議です」と秋山が答えた。

「もし事務長が、自身であの袋を持ち出したとすれば、まだ船内のどこかにいるはずでしょうが……もし他人の手に盗まれたものとする、事務長は殺されて、海へでも投げ込まれたと思わなければならない……」

「鍵はどうしてあんな所へ置いてあったのでしょうか？」

「あれは置いたのじゃありません。投げ込んだのです」

「投げ込んだ？ どこから？」

「丸窓から……鍵のあった卓子の上に傷がついていたでしょう。あれは窓から鍵を投げ込んだ時に出来た傷です。ですから事務長はまず誰れかに殺されるかどうかして、鍵を盗られた。鍵を取った奴は事務長の室へ入って、金庫を破り、目的物を盗んだ上、再び室の扉を閉めて、鍵を中へ投げ込んだでしょう。が、とにかく問題は盗みの目的物たる封書の内容にあるんですからそれか

ら調べたら、何か見当がつくかも知れませんが……大沢という人物は全体どんな人です？」

「ニューヨークの貿易商で、かなりの富豪だそうだから、あの袋の中にはよほど高価のダイヤか何か宝石類でも入っているかもしれない……じゃあ、とにかく大沢君を呼んでみましょう」

船長はボーイを呼んで大沢氏に直ぐ来てくれと伝えさせた。

◇形身の銀貨◇

待つほどでなく、でっぶり肥った、立派な風采の紳士が入ってきた。

「やあ、大沢さん。お呼び立てしまして失礼です……」

まあおかけ下さい」
大沢森二氏は、ふに落ちぬような顔をして腰をおろした。

「大沢さん。突然の事件なのですが、実は事務長が昨夜から行方不明なのです」

「エッ、行方不明？ ……船の中で？」と大沢氏は少くらず面喰った。